

2024年3月8日
21G1115007C 川原美緒
21G1113002E 高木里彩

「台湾統治と日本人」報告書

- 実施計画内容: 「台湾統治と日本人」
- 実施調査目的地: 東京都文京区、群馬県高崎市、台湾台北・新北・花蓮
- 調査期間: 2023年4月20日(木)～2024年1月30日(火)

標題の件につき、下記の通り、ご報告いたします。

目次

1. 活動の目的
2. 活動背景
3. 研究者
4. 台湾・花蓮の概要
5. 活動内容
 - 5.1. 事前取材
 - 5.2. 調査スケジュール
 - 5.3. 花蓮ツアー
 - 5.4. インタビュー調査
6. まとめ

1. 活動の目的

本研究の目的は、台湾の日本統治時代について調査し、そして日本の「台湾統治」とは何だったのかを明らかにすることである。そして、現代社会を生きる人々に「歴史の濁流に自らの人生を大きく変えられた人々」がいるという事実に向け、自分事として意識してもらうことである。

大きく分けて

- ・戸籍調査
- ・当時を知る方への聞き取り調査

の2本の軸で調査を行う。

台湾はとても親日的である。この親日性の所以は日本統治時代にあると言われている。台湾は、日清戦争後の下関条約が締結された1895年から、第二次世界大戦が終結して日本が降伏する1945年までの約50年間、日本の植民地だった。2024年1月1日に発生した能登半島沖地震を受け、台湾政府は日本に6000万円の義援金を贈るという声明を出した。また、国民からの自主的な募金の総額も3億円を超えている。調査を通して、親日性の所以についても明らかにしていく。

台湾の中でも、特に台湾東部の花蓮縣に注目する。「湾生」・「台湾の日本語世代」の双方が生きた、複雑に絡み合った編み物のような歴史を今、「湾生」・「台湾の日本語世代」の視点から見つめ直す。

- ・日本による「台湾統治」は歴史の教科書には書かれていない日本の歴史の一部分であるが、現代社会においてそれを深く知る人は多くないのが現状である。
- ・他の支配地域には見られない現存する記録の多さや、現在もそれを管理してくれている方々がいることも台湾の特色と言えるため、その背景や管理している方々の声も取材する。

2. 活動の背景

この研究のきっかけになったのは、私（川原美緒）の祖母が日本統治時代の台湾花蓮縣で生まれていることである。私はもともと台湾に対して特別な興味を持っていただけではなかった。しかし、私の祖母の戸籍謄本を見せてもらった時から、台湾の“日本統治時代”は私にとって、“どこか遠い昔話”ではなくなった。祖母の出生地の欄に「台湾 花蓮港市」と記述があったのだ。祖母の生い立ちについて全く知らなかった私は驚きを隠せなかった。出生地について祖母に尋ねると、祖母の祖父が日本から台湾に渡り、そこから祖母の代までの3世代が台湾の花蓮で生活していたことを教えてくれた。

・祖母は2歳の時終戦を迎え、生まれ育った台湾から日本の引き揚げ船に乗り、日本本土に引き上げた。2歳だった祖母は引き揚げ船に乗る時に、0歳だった弟をおぶって船に乗った。

・本土に引き上げた後は、九州地方→中国地方→関東地方という順に、家族とともに親戚の家を転々とした。手持ちの財産が少なく常にお腹を空かせていた。親戚が1階に住んでいる家の2階に居候をしていた頃、祖母は母から「1階に行く時は、親戚を見ないようにしなさい。（親戚たちが）ご飯を食べているのを見たら羨ましくなってしまうでしょう。」と忠告をされていた。家族は苦勞がたえなかった。

3. 研究者

21G1115007C 川原美緒

21G1113002E 高木里彩（共同研究者）

4. 台湾・花蓮県の概要

1. 台湾の概要

・台湾の歴史¹

東アジアに浮かぶ小さな島である台湾は、かつてから大国に囲まれ、近代にはオランダ、清、日本、からの植民地支配を受けてきた。

本研究において「日本統治時代」と呼ぶのは、1895年から1945年まで続いた短いようで長い、約50年間のことをさす。台湾は、日本にとって最初に獲得した植民地である。

日本の統治が始まったのは、1894年から1895年にかけて日本と清国の間で行われた日清戦争がきっかけである。日清戦争前は台湾は中国清朝の支配を受けていた。日清戦争で日本が清朝に勝利したあとの講和条約「下関条約」によって台湾島全土は日本の一部として割譲されたのである。その後日本政府は、台湾総督府を中心とする統治体制を確立させた。

日本政府は日本本土から、日本人を計画的に台湾に移住させる政策を敷いた。台湾に移住するには厳しい審査を通過する必要があると、一定の基準を満たしている人しか渡航が許されなかったそうだ。基準には、所得、家族の有無、職業の安定性など、厳しいものが多かった。故に、台湾に移住をした人は比較的裕福で所得の高い人に限定されていたようだ。このことが、後に触れる台湾人の日本時代にいた人への尊敬の念や、お互いが築いた友好的な関係性に関与している。当時、特に台湾東部は、開発が進

¹ 京俊介. 台湾探訪と二・二八事件・白色テロ台湾現代史の負の遺構を訪れる. file:///Users/aa/Downloads/160010390207kyo-chukyo-u.pdf. (最終閲覧2024. 2. 2)

んでいなかった。そのため日本人達は未開の地に移り住み、0から土地を開拓し、自らが暮らすための基盤を作っていた。

1945年8月、日本は太平洋戦争に敗戦。これを期に台湾の日本統治時代は終焉を迎える。日本による統治は終わり、1946年から当時台湾に住んでいた日本人達は日本本土へと引き揚げることとなった。「引き揚げ船」と呼ばれる船に乗って日本の本土へ戻っていった。その際、日本人たちは、1人につきリュック1つ分の持ち物と現金1000円といった、わずかなものしか携帯が許されなかった。日本のエリートとして台湾に渡り、台湾で大きな富を築いた人たちがであったが、この引き揚げの携帯品規制があったため、蓄えた財産を捨てることとなったのだ。私の祖母の一家のように日本本土に引き揚げたあと、貧しい暮らしを強いられる人も多かったそうである。

日本統治時代が終わったあと台湾は、中国大陸からきた、蒋介石率いる中国国民党の支配を受けることとなる。この時代に起きた事件が「台湾二・二八事件・白色テロ」である。国民党の支配は、日本時代に比べて劣悪なものだった。官僚組織の腐敗や、治安の悪化がおこり、台湾では「犬が去って、豚が来た」と、日本を「獰猛で騒がしいとはいえ、番犬として重宝される犬」、国民党を「食べるだけで何も仕事をしない豚」に例えて揶揄する言葉が流行したという。この粗悪な経済状況の中、台湾の人たちの国民党に対する不満はたまっていった。1947年、台北で起きた、国民党政府が台湾人に向け発砲をした事件をきっかけに台湾人の国民党に対する不満は爆発した。各地で起きた反国民党の暴動に対し、国民党は武力で鎮圧しようとした。そして、国民党は台湾人たちの反国民党思想は日本統治時代に日本によって植え付けられたものである、という思想のもと、1947年に戒厳令を出し、白色テロ・恐怖政治が始まった。この間、多くの台湾人が投獄、処刑された。ターゲットにされたのは、日本統治下で高度な教育を受けた、弁護士、医者をはじめとするエリート層が多かった。戒厳令が解除される1987年までの38年間、台湾人たちは政治活動や言論の自由が制限されただけでなく、日本語で話すことも禁止されたのである。「犬が去って、豚が来た」や、「台湾二・二八事件」、「白色テロ」により、台湾の中では国民党統治に比べて日本の支配の方がまだ良かった、という思想が広がり、この思想が今の台湾の親日性に影響していると言われている。

2. 花蓮県の概要

台湾東部中央に位置し、東側は太平洋に面している。中央山脈と海岸山脈が走るこの土地は台湾の中で最も面積の大きい県だが、多くが山岳地帯である。日本人が移住する以前は山岳民族「アミ族」「タロコ族」といった原住民が住んでいる土地であった。初めて平地が開拓されたのは、移住をした日本人たちによる区画整備が行われてからである。ここに日本統治時代、台湾に置かれた5州3庁のうちの一つ、花蓮港庁が置かれた。当初花蓮には港湾施設はなく、移住者たちは浜から上陸した。波が高い日は入港、出港いずれも困難を極めた。

5. 活動内容

5. 1. 事前取材
5. 2. 調査スケジュール
5. 3. 花蓮ツアー
5. 4. インタビュー調査

5. 1. 事前取材

事前調査として、台湾在住で、独自に台湾の日本語世代の方へのインタビュー調査を行なっている権田猛資さんからお話を聞いた。

①2023年4月20日 権田猛資さん オンライン取材

権田猛資さん：バシー海峡戦没者慰霊祭・廣枝音右衛門氏慰霊祭事務局長。2013年に台湾へ渡る。台湾南部高雄市にて豚骨ラーメン店を営む傍ら、台湾の日本語世代の方々の声を聞き、YouTube「ゴンタケ台湾channel」にて発信している。

以下、インタビューの要旨。

川原：印象的だったお話はありますか。

権田：直近で言うと、台湾の元日本兵だった方々が日本国籍の裁判を起こされたんですよね。で、先月ですかね、最高裁まで行って、結局原告の請求は棄却するって形でこの裁判自体は終わっちゃったんですけど。そのお爺さんまだ大変お元気で2019年の裁判を起こしたときに言っていたのは、この裁判「正直今だから言えるけど、勝てるとは思っていない。」と。本当に自分たちの請求が通るとは思っていないし、自分にはもうお子さんもいるしお孫さんもいるし、もし自分が日本国籍に本当になっちゃったら子供達はどうなるんだって、そういう難しさも分かった上であえてそう言う裁判を起こしたんだ、と。なんで裁判を起こしたんですか、って言ったら、いろんな思いがあるんですけど、一つ言っていたのは、「いや、自分の先輩たち、戦友にこのままじゃあの世に行っても顔向けができない」と。「無念のまま日本人だと思って、でも日本政府から蔑ろにされてしまって、いろんな嘆願書書いたり請求したり色々運動したけど認められないまま亡くなった先輩たち戦友たちに顔向けができないから自分はちゃんと声をあげたいんだ」と、最後。それと同時にやっぱりわれわれですよ、戦後生まれの若い日本人に、あとは台湾人の若い人たちに自分たちのような日本人としてのアイデンティティを持って当時戦争を戦った、そして戦後はさっきおっしゃった二二八事件とか白色テロで、元日本人であったがゆえに命を落とした戦友たちがいるって言うことを、そう言う歴史を忘れないでほしいってことを仰って。その思いは、なんて言うんですかね、自分は当事者ではないので本当にはわからないですけど、でも100歳になって日本にわざわざ赴いて行動して、声をあげたと。いろんな負担もありますよね。経済的にも、体力的にも精神的にも。それでも行動を起こしたその100歳のお年寄りの方の声を聞いて、そう言う声はむしろわれわれ若い世代が、ちゃんと記録をしてできれば多くの人に発信することが重要なんじゃないか、と再確認させられたのが、国籍裁判の時なんですけど。

高木・川原：ありがとうございます。

川原：最初におっしゃってた日本人のアイデンティティが本当に現れているエピソードですね。

権田：そのかたは本当に今でも日本人だと思っている方で、戦争が終わった後に2回密航して日本に行こうと思っていたんですよ。もうこのまま国民党の元では自分たちは生きていけないし、いい人生送れないからってことで、密航を企てたんですけど失敗に終わって警察に捕らえられちゃって、結局その後7年以上自由のない生活になっちゃったんですけど。日本に実際に密航したり、企てたりした人は結構いるんですけど、同時に、アメリカに留学するっていう選択をした人も当時は結構いて。なので台湾独立運動とかっていうのは日本とアメリカを拠点に戦後、行われていたんですけど、私が今交流させていただいている南部のお爺さんも、台湾にこのままだら自分の将来は見えないし、経済的にも飯は食っていけない、と。だから、選択として留学、アメリカへ行くって選択をしたんだっていう方も結構いて。結構80代90代のおじいさんって、いわゆる日本語世代で頭脳明晰な方にお会いすると、英語ペラペラだったりするのでかっこいいですよ、みなさん。日本語、英語、中国語、台湾語。4か国語喋れるってわけですよ。みなさん戦後アメリカ社会で、台湾人のグループを形成して、独立運動をやる人もいれば、ビジネスで成功された方もいれば、結構いろんな方がいますね。

高木：すごいですね。

川原：日本に密航っていうのは数が多い話なのですか？

権田：結構、私が知り合ってる中でも当時日本に密航を企てたよ、とかそういう話は聞きますし、実際に密航した方にもお話聞いたこともありますし、結構いますね。もちろん、結構いると言ってもほとんどが、っていうわけではなくって、台湾社会ではこのままでは自分達は虐げられて生きていけないっていうことで、海外に目を向けた人って結構いるので、合法的に留学って手段の方が圧倒的に多いとは思うんですけど、戦後の直後の混乱期だと結構密航って人もいますね。

実際に日本統治時代の台湾を知る方に会い調査している方のお話を聞き、これから自分たちで調査していくことにワクワクが膨らんだ。「日本語世代の台湾人」は、自身のアイデンティティについて複雑な思いを抱いている人がいることを知った。生まれた場所は「かつて中華圏にあった台湾という島である日本の一部の地域」で、自分は日本人であると信じて疑わずに育ち、太平洋戦争が終わった途端、「あなたは日本人ではありません」と突きつけられた。いわば「母国に見捨てられた」状態と同じなのだ。権田さんのお話を聞き、日本語世代の台湾人の方の中には、「日本人以上に日本人の心を持っている」人がいることを学んだ。

教科書でなんとなく見たことのある歴史の渦中において、歴史に人生を翻弄された方々には、幸せな思いも、辛くしんどい思いもされている。だからこそこれから調査を進めていく上で、軽い気持ちや、自分の興味関心・好奇心を満たすためにお話を伺うのではなく、思いを引き出し後世に伝えていくことが目的であることを意識し続けなければ、忘れてはいけないと感じ、身が引き締まる思いがした。そして、インタビューをさせていただく方は自身が経験された事実について、どのような思いを抱えているのかを、慮りながら調査を進めていくことが求められるのだ、と決意を新たにした。

②2023年4月26日（水） 一般財団法人台湾協会 訪問

清水一也さん：群馬県高崎市在住。一般財団法人台湾協会理事長。昭和18年、台湾花蓮縣（当時の花蓮港市吉野村）にて生まれた湾生。祖父が日本人移民村である吉野村の村長を務めていた。3歳で終戦を迎え、1946年3月に引き揚げた。

八田修一さん：日本統治時代の台湾で、烏山頭ダムを建設した日本人土木技師八田與一のお孫さん。出身は中央大学法学部で、私たちの先輩でもある。

一般財団法人台湾協会にて台湾と日本の歴史的事実についてのお話を伺った。また、台湾協会理事長の清水一也さんから、インタビューをさせていただける湾生を紹介していただく約束をした。

一般財団法人台湾協会には台湾に関する資料があるため閲覧させていただいた。中でも、戦前に日本から公務員として台湾へ渡った人たちの名簿をかあしてくださった。私の祖母一家にまつわる花蓮港の職員についての資料を閲覧した。詳しくは、5.4. 祖母のルーツ調査 で後述する。

5.2. 調査スケジュール

2023年7月1日（土）	湾生インタビュー（場所：日本群馬県高崎市）
2023年7月27日（木）	台湾総督府職員録調査（場所：台湾台北市台湾中央研究院）
2023年7月28日（金）	花蓮各地ツアー①
2023年7月29日（土）	花蓮各地ツアー②
2023年10月17日（火）	台湾総督府職員録調査（場所：台湾新北市国立台湾図書館）
2023年11月13日（月）	令和5年第62回 台湾日本人物故者慰霊祭 参列
2023年11月14日（火）	台湾歴史博物館見学
2023年11月15日（水）	令和5年第62回 台湾日本人物故者慰霊祭 参列
2023年11月16日（木）	日本語世代インタビュー（場所：台湾桃園市）
2024年1月28日（木）	花蓮文化創意産業園區訪問
2024年1月29日（金）	花蓮文化創意産業園區、花蓮港庁跡地訪問

台湾中央研究院・花蓮縣取材 2023年7月26日～7月31日 台北市・花蓮縣

日時	行程	宿泊先
----	----	-----

7月26日 (水)	15:40 [NRT]東京成田国際空港T2発 キャセイパシフィック航空CX451便 18:35 [TPE]台湾桃園国際空港T1着	グリーンワールド台北駅 Hotel Green World Taipei Station 台北市, 中世区, 重慶南路一段21號 No. 21, Section 1, Chongqing South Road, Zhongzheng District, Taipei, 100
7月27日 (木)	台湾中央研究院(台北駅から22分+徒歩12分orバス5分) (台北市、9時開館18時閉館) 曾祖父・高祖父の資料を用意してくれている 取材 台風の影響で花蓮への移動中止	同上
7月28日 (金)	台風の影響により花蓮入りが遅れる	クラシックリゾート(經典假日飯店) Classic City Resort 花蓮縣, 花蓮市, 國聯五路139號 No. 139, Guolian 5th Road, Hualien City, Hualien County, 97050
7月29日 (土)	9:30 馨憶精緻民宿 集合 10:00 出発 七脚川事件紀念碑→頭目の家→吉野神社跡 →拓地開村紀念碑→楓林步道(吉野村全景を展望)→吉野堰(木瓜溪の取水口)→地神様 見学 午後 →花蓮文化創園區見学	同上
7月30日 (日)	9:30 馨憶精緻民宿 集合	グリーンワールド台北駅 Hotel Green World Taipei

	<p>10:00 出発 花蓮港→松園別館等見学</p> <p>18:00 花蓮駅発 台湾鐵路 特急自強(3000) 21号</p> <p>20:17 台北駅着</p>	<p>i Station</p> <p>台北市, 中世区, 重慶南路一段21號 No. 21, Section 1, Chongqing South Road, Zhongzheng District, Taipei, 100</p>
<p>7月31日 (月)</p>	<p>13:00 [TPE]台湾桃園国際空港T1発 キャセイパシフィック航空CX450便</p> <p>17:20 [NRT]東京成田国際空港T2着</p> <p>解散</p>	<p>帰国</p>

国立図書館・国立台湾大学取材 2023年10月16日～10月18日 台北市・新北市

日時	行程	宿泊先
<p>10月16日(月)</p>	<p>10:50 [HND]東京成田国際空港T3発 エバー航空 BR189便</p> <p>13:30 [TSA]台北松山国際空港T1着</p> <p>夕食 台湾大の学生と座談会</p>	<p>グリーンワールド中華 Hotel Green World Taipei Zhonghua</p> <p>13F, No. 41, Zhonghua Road, Section 1, 100 台北市, 台湾</p>

10月17日(火)	午前 国立台湾図書館(台北駅から18分+駅からすぐ) (新北市、9時開館18時閉館) ID取得 資料の調査 取材 午後 国立台湾大学取材	同上
10月18日(水)	16:20 [TSA]台北松山国際空港T1発 エバー航空 BR190便 20:05 [HND]東京成田国際空港T3着	帰国

慰霊祭 2023年11月12日～11月16日 台北市・台中市・台南市・高雄市

日時	行程	宿泊先
11月12日(日)	7:55 羽田空港発 チャイナエアライン CI 223便 10:55 台北松山空港着 18:00 権慶川菜 夕食会	【台北泊】 グリーンワールド中華 Hotel Green World Taipei i Zhonghua 13F, No. 41, Zhonghua Road, Section 1, 100 台北市, 台湾
11月13日(月)	9:00 台北市第一殯儀館(景行廳)(台北市市民権東路二段一四五号)にて法要取材 12:00 昼食 台中へ移動 14:30 台中市北区宝覺寺(台中市北区健行路一四〇号)にて法要取材	【台南泊】 ケンブリッジ台南ホテル No. 271 Section 2, Minzu Rd, West Central District, Tainan City, 台湾 70042 台南市, 中西区民族路二段271號

	16:00 台南へ移動	
11月14日(火)	<p>台南歴博にて調査。 可能であれば学者の方、学芸員の方 に取材。</p> <p>13:00 台湾鉄道 台南駅発 高雄へ</p>	<p>【高雄泊】 カインドネスホテル カ オション メインステー ション</p> <p>No. 295, Jianguo 2nd R d, Sanmin District, Kao hsiung City, 台湾 807</p> <p>No.295, Jianguo 2nd Rd, 三民区(サンミン), 高 雄市, 高雄</p>
11月15日(水)	<p>10:00 高雄市鳥松區第四公墓納骨堂(懷恩賓塔) (高雄市三民區本館路六〇〇巷二十二号) にて法要取材</p> <p>12:00 昼食</p> <p>15:00 台湾高速鉄道で台北へ</p>	<p>【台北泊】 グリーンワールド中華 Hotel Green World Taipe i Zhonghua</p> <p>13F, No. 41, Zhonghua R oad, Section 1, 100 台 北市, 台湾</p>
11月16日(木)	<p>午前 桃園市へ移動(台湾鉄道)</p> <p>11:00 桃園市にて日本語世代ヒアリング</p> <p>18:25台北松山空港発 チャイナエアライン C1 222便 22:15羽田空港着</p>	帰国

花蓮の時の・取材 2024年1月28日～1月30日 台北市・花蓮市

日時	行程	宿泊先
1月28日(日)	<p>8:35 [HND]羽田空港T3発 日本航空 JL097便</p> <p>11:40 →12:15 [TSA]台北松山国際空港T1着 タクシーにて台北駅へ</p> <p>14:00 台北駅 発 自強(3000) 428号</p> <p>16:18 花蓮駅 着 タクシーにてホテルへ、チェックイン 17:00 花蓮文化創意園区</p>	花蓮泊
1月29日(月)	<p>9:00 花蓮市公所</p> <p>10:00 花蓮港廳跡地</p> <p>11:00 花蓮海岸線</p> <p>12:00 文創区・福住橋跡地・佐野家跡</p> <p>13:00 ホテルにて荷物回収 タクシーにて花蓮駅へ</p> <p>13:26 花蓮駅 発 太魯閣号</p> <p>15:50 台北駅 着</p>	台北泊
1月30日(火)	<p>午前 国家228記念館</p> <p>15:40 [TSA]台北桃園国際空港T2発 日本航空 JL8664便</p> <p>19:40 [HND]東京成田国際空港T 2着</p>	帰国

5.3. 花蓮ツアー

2023年7月27日夕方、台北駅から特急列車、自強号に乗って花蓮駅へと降り立った。当初の予定では、27日ではなく26日に移動することになっていたが、26日に台湾に台風が台湾南東部を直撃した影響で全ての列車が運休になっていたため、一日遅れての到着になった。私は今回、初めて花蓮を訪れた。花蓮駅を出た瞬間、台北の忙しなさとは全く違う、のどかでのんびりした、どこか懐かしいような空気を感じた。「この場所が好きだ」直感的にそう思った。

▼花蓮駅



7月の花蓮への渡航では、主に2023年7月29日から30日にかけて、片桐秀明さんの案内で花蓮に残る日本統治時代の痕跡や、花蓮最初の官営移民村である吉野村の跡地を巡った。山地が多く平地が少ない花蓮の地理的特性や原住民と日本人移民たちとの関係、移民村開拓の歴史を垣間見ることができた。

・お世話になった方

片桐秀明さん：台湾花蓮市にて馨憶（しんい）民宿を営んでおり、独自に台湾について調査している。台湾の日本統治時代だけでなく、花蓮の原住民族である「アミ族」にも精通し、豊年祭の様子も教えていただいた。

2023年7月29日

花蓮ツアー1日目

朝ホテルを出発し、片桐秀明さんの経営する馨憶民宿に伺った。馨憶民宿では片桐さんと片桐さんの奥さん（台湾の方）、今回一緒にツアーに同行することとなった、名古屋大学大学院で教授を務め、台湾について研究をしている釈七月子教授が出迎えて

くれた。花蓮県の概要と歴史について軽く説明を受けてから、早速出発した。片桐さんの奥さんはタクシードライバーをしており、奥さんのタクシーに乗り、花蓮ツアーは始まった。

台風一過で日差しが照りつける中、まず最初に訪れたのは、チカソワン事件の碑である。チカソワン事件とは、日本による統治が始まって間もない頃に起きた、花蓮の原住民族「アミ族」が日本政府に対して起こした暴動事件である。花蓮には日本統治が始まる以前から住み着いていた原住民族がいくつかあるが、代表的なものは、「タロコ族」「アミ族」である。温厚なアミ族に対してタロコ族は攻撃的な特性を持っていた。日本政府は花蓮を統治するにあたり、攻撃的なタロコ族の監視を、アミ族にさせることにした。しかし、日本政府の命令に忠実に従うものは少なく、アミ族の中には監視を怠る者や、労働条件に不満を持つ者が多かった。こういったことを背景にアミ族の不満は爆発し、蜂起を起こした。この暴動は日本政府によって鎮圧され、アミ族の住んでいた土地を没収した。アミ族はかつてから住んでいた地を追われることになったのだ。この跡地はのちに「吉野村」という移住してきた日本人の官営移民村として発展することとなる。²

▼チカソワン事件記念碑



再びタクシーに乗り込み、次の目的地へと向かった。ついた場所は草むらと噴水のある、公園のようなところで、現地の子どもたちが駆け回って遊んでいた。その公園のちょうど真ん中に、2から3mほどの高さのある石碑が立っていた。「花蓮吉野村開拓記念碑」である。

²坪田＝中西美貴。「帝国の農業労働者台湾近代糖業のなかの日本人」（2021）。https://www.jstage.jst.go.jp/article/joah/55/0/55_25/_pdf。（最終閲覧2024. 2. 3）

▼花蓮吉野村開拓記念碑



アミ族の住んでいた場所の跡地に作られた吉野村は、花蓮縣で一番初めに開村した官営移民村である。その吉野村の開村を記念した石碑だった。碑に刻まれている文字は台湾の言葉で、この石碑の隣には台湾語と英語で碑の説明があった。

▼花蓮吉野村開拓記念碑の説明



ちょうどお昼時になったので、休憩を兼ねて昼食を取ることにした。案内されたのは日本風の家屋だった。「西村の家」というお食事処である。

▼西村の家



ここは、吉野村でかつて村長を務めていた西村さんが当時住んでいた家をリノベーションした場所。現在は地元で愛されるお食事処になっている。私たちが通された場所は離れの小さな小屋だった。小屋の中には日本酒やウイスキー、ワインなどの瓶が飾られているおしゃれな空間になっていた。

▼西村の家にて。（中央）片桐さん・（右）片桐さんの奥さん・（左）地元の親子



机の中には、過去に西村の家に訪れた方の写真が大量に飾られていた。貸していただいたお手洗いには、一般財団法人台湾協会の理事・清水一也さんらが映った写真が飾られていた。この場所で提供されているのは、台湾の伝統的な料理だ。私たちは、素麺、魯肉飯、豆皮などをいただいた。食事を済ませお腹が膨れたところで、次の目的地に向かった。

10分ほどタクシーで行くと、日本風の門構えが見えてきた。「吉安慶修院」である。慶修院は、日本統治時代に日本人によって建てられた。当時は吉野村一体を見守る寺院だったそうだ。戦後、改修が加えられ、現在は日本統治時代に花蓮で亡くなった日本人が祀られていて、現在は観光地にもなっている。カラフルな風車やラガーで飾られており、日本では見られないアレンジがされていると感じた。この日も若いカップルが訪れていた。

▼慶修院



その後、私たちは山の上にある、花蓮、特に吉野村があった地域を見渡すことができる展望台に向かった。台風一過ということもあり、とても良い景色だった。

▼展望台からの様子。この地域のほぼ全域が吉野村だった。



馨憶民宿に戻り少し休憩をしたあと、私たちは徒歩で花蓮文化創意産業園區に向かった。

この場所は、統治時代に製糖・酒造工場として建てられた建物群であり当時の姿がそのまま残っている。文化交流の拠点として今も使われており、イベントが開かれることもあるそうだ。この日は、犬の散歩で訪れている人が多かった。他にもダンス動画の撮影をしている若者たちや、ウォーキングをしているお年寄り、ピクニックを楽しむ親子連れがおり、のどかで平和な雰囲気だった。市民の憩いの場として親しまれていることが伺えた。

▼花蓮文化創意産業園區



花蓮文化創意産業園區内の建物内。この日は学生の作品の展示が行われていた。

2023年7月30日

花蓮ツアー2日目

前日と同じ時間に馨憶民宿に集合した。午前中は馨憶民宿付近の日本時代の建物をめぐることになった。片桐さんから日本時代の建物の特徴についてお話を伺い、市内へ出てフィールドワークを始めた。

以下、私たちが見つけた花蓮に残されている日本時代の建物である。





壁板が横向きに張られ、屋根に傾斜がある。現代の台湾の建物と比べると、窓枠が大きい。リノベーションされて商店になっている建物も少なくない。

夏の厳しい日差しを浴びながら、私たちは海岸の方向へ向かった。市街地から離れれば離れるほど車通りが少なくなっていった。吹き出す汗を拭いながら海沿いの大通りまで歩き、道の脇に目をやると、年季が入っていきそうな大きな石像のようなものが目に飛び込んできた。そばにある看板には「花蓮縣歴史建築」という文字と共に、日本語で「ふくすみ橋」と書いてあった。

▼ふくすみ橋



日本統治時代に建設され、当時の花蓮港市中心部にかかっていた橋だ。現在の花蓮文化創意産業園區の徒歩圏にあったが、老朽化が激しく、保存するために海沿いに移動したそうだ。祖母や祖母の家族もこの橋の上を歩いていたのかもしれない、と思わされた。

市街地のワンタン屋で昼食をテイクアウトし、馨憶民宿まで戻った。午後は、1日目と同じように、タクシーに乗って各地を回った。

最初に訪れたのは、花蓮の女学校と女学校の宿舎跡だった。国立花蓮女子高級中学校。開校は日本統治時代だという。統治時代、花蓮に住んでいた日本人の女学生が通っていた学校だ。現在も国立花蓮女子高級中学校と名前を変えてはいるものの、花蓮の女学生の名門の学舎だそうだ。建物は、日本時代のものではなく建て替えられたもののようだった。

▼国立花蓮女子高級中学校



国立花蓮女子高級中学校の向かいには、草が生い茂る一角があった。その奥には、日本統治時代の古い建物らしきものが見えた。これこそが、日本統治時代の花蓮女学校の宿舎跡である。

▼女学校の宿舎跡



屋根や門など、ところどころに歴史を感じ、多くは壊れかけていた。中には入れないようになっていて、保存のために塀で囲われているように見えた。全く手入れをされていないわけではなさそうだが、現在何かの用途で使われている、ということもなさそうだった。

日本人の引き揚げの際、日本人は波止場の倉庫で船を待った。倉庫内で何日か夜を明かした人もいたそう。中はギャラリーのような空間になっていた。

再びタクシーに乗り、海沿いの坂道を登っていった。車窓からは晴れ空の本の花蓮港をみることができた。タクシーを降りて、歩いて少し坂を登ると「松園別館」という看板とともに、たくさんの松の木に囲まれたコンクリートで作られた大きな建物が目に飛び込んできた。台湾に残されている日本統治時代の建物の中でも、一風変わった雰囲気醸し出していた。

▼松園別館



松園別館は日本統治時代末期の1943年に日本の軍事施設として建てられた。花蓮市の海と空を見渡すことができる小高い丘の上に位置しているのは、敵の攻撃をいち早く察知するためだそう。太平洋戦争末期には、花蓮にあった特攻隊の基地から飛び立つ特攻兵たちが出撃命令を待つ場として使われていた。隊員には台湾人の日本兵もいた。

2階には神風特攻隊の展示があった。花蓮港から飛び立った特攻隊員の写真や、太平洋戦争についての説明がされている展示もあった。

日本統治時代に作られた防空壕もあったが、この日は封鎖されていて入ることは叶わなかった。

▼松園別館内の展示



見晴らしの良い展望台にもなっている。松園別館から太平洋を眺めると「特攻隊としての出撃間際の青年たちもこの景色を眺めたのか」と思わずにはいられなかった。

現在は、花蓮文化創意産業園區と同じようにリノベーションされ、現地の方の手作りの雑貨店やおしゃれなカフェが併設された公共施設になっている。戦争遺跡ではあるものの、平和な空気が流れている、そんな場所だった。

その後、丘を降って海沿いの大通りを走った。貨物船が行き来する港まで来たところで、車を降りた。港に沿って少し歩くと、白い大きな倉庫がいくつも並んでいるのが見えた。

1946年から、台湾に住んでいた日本人たちの日本本土への引き揚げが始まった。この港は、日本人たちを乗せた引き揚げ船が、出港する場所だった。花蓮から引き上げた人たちにとって、この港は最後に踏んだ台湾の地だったのだ。

引き揚げの対象者はまず、港に集められ、港のそばにある倉庫に収容された。船がすぐ来る時もあるが、場合によってはこの倉庫の中で2、3日待たされることもあったそうだ。

▼花蓮港 倉庫群



当時日本人たちは、大きな倉庫の中にぎゅうぎゅう詰めになって幾晩も明かしたという話を伺った。

現在の倉庫の中は、倉庫として使われているもの、立ち入り禁止になっているもの、アートを楽しむ場になっているものなど、様々な使い方をされている。スプレーアー

トにより、可愛らしい姿になっている倉庫を眺め、私の祖母もこの倉庫のどこかに収容されていたと考えると、感慨深い気持ちになった。

5.4. インタビュー調査

私たちは、日本統治時代の花蓮港の様子を知るために、当時花蓮港で暮らしていた方にインタビュー調査を行った。

お話を伺ったのは、私の祖母と同じように、台湾で生まれ育った日本人「湾生」と、日本統治時代に日本語で、日本人として育てられ、1945年まで日本人としての自らのアイデンティティを持っていた台湾人「日本語世代」とかただ。

5.4.1 湾生インタビュー

2023年7月1日 群馬県前橋市・高崎市

10:30 道の駅まえばし赤城にて「台南フェア」見学

13:00 高崎市にて「湾生」である新井静代さん、清水一也さんに取材

新井静代さん：群馬県高崎市在住。昭和7年、台湾花蓮縣（当時の花蓮港市吉野村）にて生まれる。父がバスの業者を営んでおり、毎朝バスに乗って幼稚園に行っていた。国民学校（当時の小学校）を卒業後、女学校に進む。

※清水一也さんの親戚にあたる方

【インタビュー抜粋】

川原：台湾での楽しかった思い出を聞かせて欲しいです。

新井：やっぱりね、泳ぎに行きたいわけね。だけれども昔のことだからね。川で泳ぐんですよ。今だったらプールとかなんだろうけど。それが、牛も泳ぐのよ。

清水：その川は、農業水路だから。川は人も泳ぐけど、

新井：牛もそこで泳ぐんですよ。一緒に泳ぐんじゃなくて、牛が泳いでて、牛が上がったなって、それ見計らってね。裸で入って泳ぎましたよ。結構幅の広い。

清水：広がったんだ。でもあれ今行くと結構狭い川なんだけど、子供だったから結構広く感じたんだよ。お寺がいくつかで場所が囲まれていて。そこへ行くとかあらず流れているの、川が。そこでのことを覚えているの。他にもあるでしょ、楽しかったこと。

新井：海には行きました。

川原：海では泳いだんですか。

新井：泳ぎましたよ。あの、ばあちゃんなんかがいる頃。

清水：ほんとは泳いじゃいけないところなんだけれど、

新井：牛車にね、おっきい、

清水：ちょうど4キロ。ここの住んでた吉野村から太平洋まで、約4キロ。歩いたらいい2時間くらいなんだけど。そこに牛車でみんなで乗かって色々積んで、食べるものも積んで。

新井：ね、牛車で牛が大変だったでしょうけれども。何人もそこに乗ってね。ごとうとうと引かれてねそれで行ったの。本当に牛は牛でこっちで遊ばせといてね、

清水：海で泳いだり何か持って行って何か食べたりしたの？

新井：うん、食べた。

川原：どういうものを海で食べたのですか。

新井：花蓮港っていうところで、割ともうそれっきり住んでないですけどね。住んでたところがね、幼稚園の坂から降りてくるとお菓子屋さんなんですよ。すごくてね、お菓子が美味しくてね。今でもあるよね。

清水：やっぱり街に出る楽しみは海に行くこともそうだけど、やっぱり子供の頃はおかしなんでしょうね。くだものは？なんでもあった？

新井：くだものはもうなんたって、庭になってるんだから。庭中にもうね。それこそマンゴーといいね、パパイヤ、パイナップル、それから、竜眼って知ってます？ライチライチ。

清水：釋迦頭あった？

新井：あったあった。

清水：釋迦頭今やっとならでも輸入できるようになって、千疋屋では生でそれをバラしてこう凍らせたものは普通に売ってる。あんなん一個は買えないから。釋迦頭ってのはお釈迦さまの頭みたいになってる美味しい果物で。すぐ痛むから、住んでた人でないと食べられない果物。

新井：もうできすぎちゃうとね、ぐちゃぐちゃになっちゃうんでね。

清水：マンゴーも、木でなってる熟したのを食べるから、美味しいの食べてるんです。

新井：こうやってなってるでしょう、だからもうそれ取ってきては。忘れられないね、あれは。

まず、戦争の激しさが増す以前の台湾での暮らしをお伺いした。幼少期の、のびのびと明るく楽しく暮らしている子どもたちの姿が目につかぶようなお話だった。都会育ちの私にとって、少々羨ましくも感じた。

続けて、戦争中のお話も伺った。

川原：戦争が始まってから、楽しい思い出は減ってしまったのですか？

新井：吉野の小学校に、戦争が始まってからはほとんど行かなかったかもしれないね。最初のうちは様子見ながら行ったんだよね、上見ながらね。上見ながら、あ、飛行機が来たってやりながらね。。飛行機が来ちゃうんだもんだって。川が流れててね、それでも、木の下で涼んでるなんてもんじゃない、隠れてね。

清水：女学校がこうで、（位置関係の説明）ここに川が流れてるの。この女学校に行くのに、吉野村ってのはこの辺にあるから、ずっとかなり距離があるんですよ。戦争になってからバスだとか電車だとか汽車ってのはあまり使わなくなったかね。

新井：最初のうちはほらバスが使えたから、バスで学校でもどこへでも行けたんだよね。送ってもらえたんだよね。それも無くなったしそれもだんだん戦争がね。全然どうにもならないんだよね。学校にもどこにも行けなかったんだよね。だから途中までも歩いて行って、なんだっけ途中の、タウラン。あそこまで、行ったの。

清水：タウランってところはちょうど中間にある。

新井：そこから歩くってたって余裕はないんだよね。それで飛行機が来ちゃうわけ。空襲警報鳴っちゃう。それで空襲警報を木の下で見てるんだよね。飛行機言っちゃったらもう帰るんだよ。

清水：それは多分ね、飛行機が飛んでくるようになったのは昭和19年くらいだから、それまでは16年17年18年くらいまではまだそんなこの辺りはうるさくなかったんですよ。ですのて女学校に入ったのが、11,2歳か。小学校から女学校だから。

（略）

そうすると12で入ってちょうど引き上げが13だから、昭和19年くらい。女学校の入学は。もう空襲が始まる頃だ。で20年が花蓮港はずいぶん爆弾が落ちたんだ。それなので今のお話が出るのは、ちょうど入学してから引き上げるまでの間っていうのは、一番厳しい時だったので授業ができなかったんだよ。だけど学校は行かなくちゃいけないから、朝は出るけど、帰ってきちゃう。

台湾の生活にも、太平洋戦争は影を落としていたようだ。新井さんは、戦時中に何をしていたのか覚えていないようだった。学校に行けず、外に出てもすぐに空襲警報が鳴るような環境で、何もすることがなかったようだ。記憶に残るような活動をすることも制限されていたのかもしれないと感じた。

その後、新井さんが花蓮で親しくしていた台湾人（アミ族）「ららっぱさん」との思い出を伺った。

新井：ららっぱはね、帰るときね、帰るって台湾から引き上げてくる時ね、一番最後に。最後って言ってもららっぱしっかり仕事してたけれどね。「帰るな、帰るな」って言ったよ。寂しいから帰るなって。辛かったよ。本当に。アミ族の。

新井：アミ族だね。いいおじさんだった。

清水：ちゃんと名前あるんですよ。ららっぱっていうのは、水牛だっけ。水牛のことをららっぱで。現地語でね。

新井：水牛だっけ

清水：そういうあだ名がついててね。

新井：そうだったの。ららっぱららっぱでね。「ららっぱ・かさう」って言ったけれど。

新井：私なんてしーぼんぼんだったよ。しーぼんぼん、たえぼんぼんって言って。笑ららっぱが言ったの。ららっぱが私のこと静代って名前なんで、しーぼんぼんしーぼ

んぽんって言うんだ、私のこと。妹のことをたえぽんぽんって。みんなぽんぽんつけて笑

清水：静代って名前だから、しーぽんぽん。妹は多恵子で。多分、静代嬢ちゃん、たえ嬢ちゃんって意味じゃないかと思う。しず坊っていうのと同じだよ男の子で言うと。日本ならなんとか坊って言うでしょ。

新井：引き揚げ決まった時にね、内地に帰っちゃダメだって。ここにいなさいって。そうやって言ってくれたよ。ららっぱ。「帰るな、帰るな」って。

新井さんは、ららっぱさんと、引き揚げる前にもう一度会う約束をし、戦後に実際に再会を果たしたそう。日本人と台湾人の間には、支配する側・される側のような対立関係、壁はなく、フラットな「隣人」としての、人と人との関係性が築かれていたことが伺えた。

川原：帰る時はやっぱり寂しかったですか？日本に帰る時はもっと台湾にいたいと思いましたか？

新井：思ったよねえ。そりゃあ台湾のうちはよかったからねえ。なんて言ったって。台湾で生まれたしね。台湾に代わるものはなかったから。

川原：故郷なんですね。

新井：なんていっても最高だったね。

清水：ほんとの故郷っていうのかな。

▼清水さん（中央）、新井さん（右）へのインタビューの様子



5.4.2 日本語世代インタビュー 2023年11月16日

2023年11月16日 台湾・桃園市

11:00 桃園市の台湾料理レストランにて「日本語世代」である邱顯昌さんに取材。

邱顯昌さん(1932年台湾花蓮縣生まれ、91歳)

農家の家に生まれる。現在、台湾北部・桃園市に在住。かつてはホテル経営をしていた。

※奈良県在住の湾生である松本洽盛さん（1937年台湾花蓮縣生まれ。86歳。）から紹介をしていただいた。松本さんは花蓮縣の中部、鳳林で生まれ、その後花蓮港市へ引

越して暮らしていた。邱とは同じ国民学校に通っていた。今も日本語世代の方との関係がある。

日本人として育てられ、現在は日本人として生きている邱さんに、日本統治時代はどう過ごしていたのかを聞いた。すると、邱さんの答えは「幸せな時代だった」とのことだった。そして、終戦を迎え、これから引き上げていく知り合いの日本人たちを送り出す時の思い出を語ってくれた。

【インタビュー抜粋】

川原：（日本統治時代は）幸せ？

邱さん：幸せ。そう。なぜかというとな、台湾人は、日本人をいじめなかった。仲が良かった。ね。とても、お互いに、感情が良いから。でも、心配している。台湾人も心配してね。あの、日本はもう戦争で、84ヶ所がもう広場になって、瓦礫になってしまっているから。今帰ったらね、（台湾の人からしたら）可哀想で。家もないし、田んぼもないし、財産もない。何もないし。引き揚げですから。帰ったら困りますから。そして、みんなお金も持って帰ることができないでしょう。一人1000元だけでしょう。政府は一人1000元しか。それお金あげてもしょうがないですよ。だから、私のおばあさんですね、お餅を作ったんですよ。台湾のお餅って餅米で、そしてお正月にやるんですよ。甘い餅で硬い餅。硬いけど、刀で切ったら、そのまま水があったら、掛けたら、もうお腹いっぱい。だから、今言ったらね、船の中で食料があるかないか心配してるでしょう。それをお餅を作って、あげる。それを小刀があったら切って食べる。水があったら、もうお腹いっぱいになるから。これ持っていけば。あのお餅はね、1ヶ月でも2ヶ月でも壊れない（腐らない？）んですよ。腐敗しないから。これは台湾人がお正月につくるお餅です。それあるひとはあの、餅米で粉にするの。粉にしてね、そして砂糖を少し入れて、そして水を入れたら、こう混ぜたらね、お腹いっぱいになる。そうするとそういうことを日本人に、渡してる。友達に。

高木：日本に帰る日本人は、周りに結構いらっしゃったってことですか。

邱さん：ありました（いました）。

高木：お餅を渡すくらいの仲がいい人とか、たくさんいらっしゃったんですか？

邱さん：あったですよ（いましたよ）。私なんかはね、日本人は私たちの地主なんです。地主って言って、あなたたちには土地があるでしょう。私は農家ですから、土地がないから、あなたたちの土地を借りて、私たちは田んぼを作って、稲を作ったりとか。サトウキビ、甘蔗を植えたりとか。タバコでも植えたりしてね。そういうことをやった。お互い地主が2、3軒あった。田中さんとかね、それから、横井さんとかね。ちゃんとまだ覚えていますよ。

川原：覚えていらっしゃるんですね。

また、終戦以前の暮らしについても伺った。

高木：台湾の人も、日本の人も、みんな混じって、一緒にごちそうを食べていた？

邱さん：そう。地主たちが呼ぶ。そしてみんな甘えてくるんですよ。田中さんが、「おい、おじさん、あの、お父さんがね、今晚ごちそうがありますから、どうぞいらっしゃい。」「あ、そうですか、喜んで！」それで来たらもう、歓迎ですよ。私たちはもう、必ずお土産があるんですよ。あれ普通は、大体、月桂冠の。当時から月桂冠があったんですよ。月桂冠、あるいは白鶴。一升瓶のを持ってくるんですよ。そしてある時は、下駄で持ってくる。下駄、履いている下駄ね。一番良かったのはね、スルメとか、サケとかね、あれを持ってくるとね、ああ〜っと喜んで。おお〜って。そしたら、豚肉とか、鶏の肉とか。その後お酒を飲んだり。それで仕事している人、田植えしている人と、稲刈りの人なんかね、一緒に飲んで。

新井さんのお話と同じように、邱さんの住んでいる地域でも日本人、台湾人としての壁は全くないようだった。むしろ、お互いがお互いをリスペクトし合っている文化があるようだった。台湾人、日本人の隔てがなく、皆笑顔で集っている和気あいあいとした姿が目につかぶようなお話だった。

高木：邱さんが過ごされた少年時代、日本が、いた時代って、邱さんどういうふうにおもわれていますか。

邱さん：いや、良かったと思いますよ。日本で良かった。もしも、ずーっと、中国政府が今までずっと日本の領土になったら、台湾は日本とおんなじようにいい民主国家になってる。でも、台湾最近は、よくなっていますよ。日本にも負けないように、いい民主国家になっていますよ。

▼邱さんへのインタビューの様子



お二人のインタビューを通して学んだことは、日本人から見ても、台湾人から見ても双方にとって暮らしやすい環境が日本統治時代の花蓮にはあったということだ。お話を聞く前まで、台湾が親日なのは、その後の国民党の統治時代よりはまだ「まし」だった日本を、台湾は美化しすぎているからだと薄々思っていた。しかし、実際に当時を知る方の生の声を聞いて、国民党の影響も受けているはずであるが、日本統治時代は人々によって住み良い、平和なコミュニティは確かに存在していたということに気付かされた。

また、これまでお会いした湾生は、「何度だって台湾に行きたい」「死ぬ場所を選べるなら台湾がいい」などといった、台湾に対する愛を持っている方ばかりだった。そんな言葉を聞くたびに思い出すのは台湾にはもう行きたくない、と話す祖母の姿だ。大切な思い出として当時を振り返る方々と、私の祖母の台湾に対する思いのギャップを感じ、悲しく思った。また私自身も実際に台湾を訪れて魅力を知ったため、祖母の台湾へのマイナスな感情を薄めることができないかと悶々としていた。祖母にも、台湾での暮らしをした記憶があれば、祖母が引き揚げ後にした苦勞がなければ、祖母も台湾についてマイナスな印象を持つことはなかったのではないか。そんなことを思わずにはいられなかった。

6. まとめ

台湾の調査を通して台湾の人たちは、想像以上に今も日本の存在を大きく感じていることを至る所で感じた。街を歩いていると、ところどころで日本語の表記を見かける。日本の商品や日本のチェーン店の台湾店舗を見ると、台湾の言葉に直さずに、日本語のロゴをそのまま使っていることが多い。訪れた台湾の都市には必ずと言っていいほど、日本時代の建物が残されていた。リノベーションをして市民の憩いの場として使われているものや現在も住居者がいるところから、管理者がおらず荒れてしまっているものまで様々あった。専門家の方に聞いた話によると、台湾では日本時代の建造物を、あえて壊そうとする動きはほとんどなかったという。昔の建造物が残されているのは、なにも台湾は親日だからという理由だけではなく、台湾には「歴史の痕跡を後世に伝える精神が根付いている」からであるように感じた。そして、歴史を決してマイナスに捉えない台湾の姿勢にも触れることができた。

また、歴史を後世に伝えていくことの難しさを感じた。インタビューをお願いした当時の台湾の様子を知る方々は、ともに90歳を超えている方だった。湾生である新井さんは当時の記憶が曖昧になってしまっていて、当時のことを聞き出すことが難しかった。日本語世代の台湾人・邱顯昌さんへの取材をした時、邱さんが私たちに、「あと10年早ければ、日本統治時代についてもっと色々な話を聞ける人が生きていたのに」とおっしゃっていたことが印象深かった。歴史の生き証人である方々の高齢化が進んでおり、当事者の方の生の声を残せるタイムリミットはすぐそこまで迫ってきていることをありありと感じた。

台湾は現在不安定な状況に置かれている。日本人たちはこの事実にとれほど関心を持っているだろうか。私は、台湾の調査を進めていく中で台湾から日本への愛を感じた。戸籍調査でも、インタビュー調査でも調査のお願いをすると私たちが求めているもの以上の返答をしてくれることが多かったのだ。道すがらで、「あなたたち日本人？」と笑顔で訪ねてくる方もいた。対して、日本人からの台湾人に向けた眼差しはどうだろうか。研究を始める前の私のように、自分にはあまり関係のない場所であると、認識が薄い人が多いのではないだろうか。台湾はかつて日本の一部であり、現在

も日本を慕ってくれている。だからこそ、日本も台湾のこれからについて「近所で起こっていること」以上の認識をすべきなのではないか。研究を通してそんな考えを持つようになった。今後の台湾の動向に注目するとともに、研究の成果を身近な人に伝え、日本人が台湾と日本のこれからについて考えていくきっかけをつくりたい。

・参考

京俊介. 台湾探訪と二・二八事件・白色テロ台湾現代史の負の遺構を訪れる. file:///Users/aa/Downloads/160010390207kyo-chukyo-u. pdf. (最終閲覧2024. 2. 2)

台湾台南市 台湾歴史博物館

坪田＝中西美貴. 「帝国の農業労働者台湾近代糖業のなかの日本人」(2021). https://www.jstage.jst.go.jp/article/joah/55/0/55_25/_pdf. (最終閲覧2024. 2. 3)

台湾総督府職員録系統. 中央研究院台湾史研究所. <https://who.ith.sinica.edu.tw/>